奄美大島

アイランド・キャンパス
ゼミ横断、6泊7日合宿

8月30日～9月5日

30日　奄美空港につくや、
　　あやまる岬にて昼食。早くも、住用マングローブ原生林をシーカヤックで探訪した後、
古仁屋をへて、宿舎清水公民館
到着。夕食は奄美郷土料理「油ソーメン」を自分たちの手で創る。
完全自炊体制で合宿はおこなわれた。夕食は郷土料理を食す、が約束。
31日。奄美おもしろ人間訪問。
9月1日。午前中、加計呂麻島の
於斉公民館に移動。
奄美の伝説の妖怪ケンムンに会った経験をもつ広さんの話や、於斉のおばあちゃんたちの昔話を、ガジュマルの下で聞いたり、滝を見に行ったり、呑の浦の戦跡「震洋」格納庫を見にいったり
夕方、貸切バスで落日スポット
西阿室で夕陽鑑賞　神秘の経験
里さんにもらった鹿肉で鹿汁をつくって夕食とする。
2日。於斉からウミガメの産卵浜と
海塩制作工房で有名な徳浜に移動
浜にテントを建て、夜は満天の
あまりの美しさに絶句の星空の下で眠る。

３日　徳浜から清水公民館へ戻る。貝細工・工房喫茶シェルロードで思い出の貝細工アクセサリーを手作りする。
４日　午前中、古仁屋中央公民館で「奄美体験報告討論会」を開催。
それぞれの奄美体験を報告しあい、その意義をめぐって熱い討論

午後。マリンスポーツクラブ
「ボブマリン奄美」の若社長円山正吾さんのお世話で徹底海遊び。夕方まで、度連の海で遊ぶ
シュノーケリング
水上　ジェット
打ち上げは、民宿ユートピアで

５日　朝、元瀬戸内町所義永さんの世話で、花天の近大クロマグロ養殖場の餌つけ見学

奄美空港直行
伊丹に、午後到着

解散

奄美の食と出会う

奥村　芙美

今回の奄美の旅では、清水の民宿ユートピアの円山次美さんや、徳浜の榊藤光さんから調理方法を教えていただき、奄美の郷土料理を自分たちで作り、それを夕食にした。今回作った郷土料理は以下の通りである。

油そうめんと島どうふ

- 油そうめん

  ①そうめんを茹でる。

  ②キャベツ、ニラ、にんじん、ベーコンなどを油で炒め、そこへ茹でたそうめんを入　れ、一緒に炒める。

  ③白だしで味付けする。

- 豚味噌

  ①豚肉をブロックのまま血が出なくなるまで茹でる。

  ②①をサイコロ状に切る。

  ③油と刻み生姜を熱し、そこへ②を入れて炒め、さらに粒味噌も一緒に炒める。

  ④炒めたら、鰹節もふんだんに入れて少し炒め、できあがり。

- 鶏飯（ケイハン）

  ①米を炊く。

  ②鶏をたっぷりの水で灰汁をとりながらじっくり煮る。

  ③干しシイタケを水で戻し、千切りにして醤油で煮詰める。

  ④ネギ、みかんの皮、パパイヤの漬物を細かく切る。

  ⑤錦糸卵を作る。

  ⑥鶏肉を骨から外し、割く。

  ⑦シイタケの戻し汁と②のスープを濾し、酒、塩、白だしで味付けする。

  ⑧ご飯を盛り、鶏肉、シイタケ、ネギ、みかんの皮、パパイヤの漬物、錦糸卵をのせ、スープをたっぷりかけて刻みのりをのせたらできあがり。

- ヤギ汁
  ①酒を振ったヤギ肉を炒める。
  ②沸騰した湯に①とこんぶだしを入れて茹で、味を見ながら塩で味付ける。（今回は食べやすいように醤油も入れました。）

生のヤギ肉

- ハンダマの炊き込みご飯
  ①さっと水洗いしたハンダマを刻む。
  ②といだ米と①を一緒に炊く。

ヒカゲヘゴ

- ヒカゲヘゴの新芽のおひたし
  ①ヒカゲヘゴをよく茹でて刻む。
  ②①を盛りつけ、醤油などをかける。

さらに、里さんという方から鹿肉とシシ肉をいただいたので、鹿肉は粒味噌を使って鹿汁に、シシ肉は薄く切り、バーベキューにした。

今回の旅では、昨年以上に郷土料理を自分たちで作るということにこだわった。旅へ行き、その土地のお店で何かを食べるというのももちろん旅の楽しみではあるが、この旅の目的の１つは奄美の人々とできるだけ接し、そこから１人１人が様々なことを学びとるということにある。そのために、今回は円山さんや榊さんに調理方法を教えていただき、公民館の台所をお借りしてその通りに自分たちで作ってみた。

この旅のメンバーは、そのほとんどが初対面である。料理を作る過程で、最初はとても静かな台所だった。しかしだんだんと意思疎通もスムーズに取れるようになり、地元の人たちと交流するという目的だけでなく、気が付けばグループ内での交流も図れていた。

では、地元の方々との交流はどうだろうか。今回、確かに調理方法はおうかがいできたが、逆に言えばそのときにしか接することができなかった。そこで、調理方法を教えていただき、作り、食べるというところまで地元の方と一緒に過ごさせていただくというのはどうだろうか。現在、子どもたちの中にはほとんど料理などしたことがないという子も多いと聞く。調理の過程も隣で教えていただく中で、その技術や手際を見ることができるというのはとても貴重なことだと感じるのだ。そしてそれを一緒に食べることで、子どもたちだけでなく大人でも、食のことはもちろん、それ以外の部分も学べるだろう。

しかし、一般の人たちが旅行するときにそういうプランを自分たちで体験しようとするのはなかなか勇気がいる。そこでまずは教育機関の修学旅行や合宿等で体験してもらい、子どもたちから大人へ広げていってもらうことが近道なのではないかと考える。そのためには各自治体の教育委員会との協力やホームページの充実、さらにそのページの検索され

やすさの向上などが課題となってくるが、奄美の人々や郷土料理と出会うことで、訪れた人々が自分の地元にも興味を持つようになると、日本の文化がもっと面白いことになっていくだろうと期待している。

奄美レポート

文芸学部　文化学科　日本歴史・文化コース
09-1-068-0047
3年
木村 祐輔

① 奄美大島で印象に残ったこと

私は今回、奄美大島に初めて行ったので見るものしたこと全てが印象に残っている。底まで見えるきれいな海、無数に見えるきれいな星空、個性豊かな人々。その中で最も印象に残っているのは、食事である。その食事もなにがおいしかった、というような食べることではなく作るほうである。

そもそもなぜ私が料理に参加したのかといえば、私自身することがなかったのと他の人に任せっぱなしというのがなんとなく嫌だったからである。普段家にいるときはごくまれに作る、くらいのものだったのだがそれでも何かできるだろうと思って始めたのもきっかけである。

先ほど述べたように料理はごくまれにしか作らないので、そんなに好きではなかったのだがいざ作ってみるとこれが楽しかったのである。これには私なりに 2 つの要因があると考えられる。

1つ目は私が見たことのないような食材を調理できたことである。朝食は基本的にパンで済ましていたが、夕食は奄美大島の郷土料理を作っていた。だから食べたことはもちろん見たこともないような食材を切ったりしていたのである。イノシシやシカ、ヤギなどの肉類などである。イノシシは脂身が多くて切りにくい、シカは脂身があまりなく切りやすい、ヤギは臭いが独特などを考えると料理人になった気分である。

2つ目は大人数で作っていたことである。今回奄美には9人ほどで行ったのだが、実際に料理を作るのは3，4人でもその周りにはほぼ全員いて、みんなでワイワイ話していた。この食材はどう切るの？とかいちょう切りってどんな切り方？というような他愛もないことを話しているだけだったが、家で料理をする時は 1 人することが多かったのでとても楽しく感じられた。

今回の奄美大島への旅行を通じて認識したことは、みんなで料理をすることは楽しいということである。普段旅行をしてそこの郷土料理を食べるとき、たいていの人はレストランなどの外食で済ませると思う。また自分で作るといっても、バーベキューなどで簡単にするだけだと思う。しかし楽に済ませるのでなく少し時間をかけて自分たちで作れば、作っている間も食べている間も楽しいのである。料理場の確保やレシピの入手など少し難しいところもあるが、旅行に行ったときに一度だけでも自分たちで料理を作ってみてはどうだろか。

② 奄美大島で出会った人

今回の奄美旅行は普通の旅行ではなく、清先生のつてで奄美大島に住んでいる人たちと話をすることができた。本当はそれぞれの個人を挙げて述べたいのだが、誰について述べたらいいのかがわからなかったので、私が奄美の人と出会ってどういう印象を受けたかというもので述べたいと思う。

まず私が思ったことは年齢の割にしっかり社会について考えている、ということだ。私は老後、社会のことは考えずに残りの余生を生きていたいと考えていた。しかし、奄美の人は90歳になっても「宇宙開発はすごいけどわしらにはなんにも関係ない。だから台風を海の上でとどめる機械をつくったほうが絶対に役に立つ。」というように社会に対する何らかの意見を持っている。それが正しいかどうかは問題ではなく、意見を持っていることが私にとっては驚きなのである。

次に思ったのは本当に霊感の強い人がいる、ということだ。奄美大島にはケンムンと呼ばれる精霊のようなものがいるとされている。しかし奄美大島に住んでいれば誰でも見える、ということではなく見える人と見えない人がいるようである。そのケンムンを見たことがある人に話を聞くことがあった。その人によるとケンムンを見たということは他人には言ってはいけないことらしい。つまり見たことのある人同士なら通じるが、見たことの無い人には通じず逆に頭がおかしいなどと思われるということだ。言われてみれば当然のことなのだがなぜかとても納得してしまった。

このように奄美大島には、とても個性的な人が多くいる。最初人の話を聞くということにすごく抵抗があったのだが、聞いてみるととても面白い話が聞けて今ではいい体験になったと思っている。

文化学科　日本歴史・文化コース
09-1-068-0025　　鹿末　健太

奄美大島エコキャンパスツアー

●はじめに

僕が清ゼミの奄美大島エコキャンパスツアーに応募しようと思ったのは、自分の所属する民俗学ゼミの藤井先生に紹介されたのと、春休みに沖縄をブラブラ一人旅をしていた経験から琉球圏内の文化に興味を覚えたからだった。

沖縄の旅行も楽しかったが、奄美の合宿では奄美でしかできない遊びや貴重な体験をされたお年寄りの方々にお話を聞かせてもらえるという事で、民俗学の聞き取り調査としての経験も積める上に、卒論の下積みにもなるだろうと目論んで友人の木村くんを半ば強引に説き伏せて一緒に申し込むことにした。

●奄美に到着して感じたこと

奄美空港からボブマリン奄美の円山正吾さんに車に乗せてもらってあやまる岬に到着して思った事は、日差しがとてもキツくて暑いことだった。しかし、影に入ると驚くほど涼しかったし、風も本州ほどべたついてもいなかったのでとても過ごしやすかった。

また、あくまで本州との比較ではあるが、民家の塀が低いことに気付いた。これは近隣の人たちのお互いの繋がりが深いことを示していると感じた。これは公民館が集落の中心に位置していることも要因の１つだと思った。

●奄美での人物訪問

今回の合宿の僕の主な目的は聞き取り調査だったので、人物訪問はとても楽しみだった。まず最初にお話を伺ったのは「カフェこんぶち」のマスターの藤井さん。パイプの似合ういぶし銀の魅力を醸し出してるおじさんで、教養のある方で色々な話の引き出しを持っているので皆の質問にも丁寧に答えてくれた。淹れてくれたコーヒーはとても濃いがおいしかった。

次に訪問したのが奄美のブッシュマンとも呼ばれる里さん。７０年以上奄美の山や野に入り続けており、昔話、自然や動物、言葉の由来など昔から伝わる様々な知識に精通している。また御自宅は動物のはく製や８０年前の通知簿や写真など珍しいもののオンパレードで、大きな声では言えないが天然記念物のルリカケスを飼育している。

奄美大島の隣にある加計呂麻島の集落、於斎ではノブオカさんという方を中心に３人のおばあさんにお話を伺った。女性の視点からいろいろなお話を聞くことができたが、於斎の小学生が現在は７人しかいないことや、島唄や島言葉が消えていくという話を伺った時は少し寂しそうな口調だったのが印象的だった。

於斎で忘れてはいけないのは奄美で有名な妖怪であるケンムン（クンムン）を実際に見たという広さんだろう。ノブオカさんなどはケンムンの話はまるで信じていなかったが、広さんのケンムンの話はリアリティや臨場感に溢れており、とても想像や思いつきで話せるような内容ではなかった。

於斎で過ごした翌日は徳浜という場所まで移動し、そこでさんご塩の生産、販売をしてらっしゃる榊さんという方にお世話になった。榊さんはとても早口で話が聞き取りづらいこともあったが、自分の思想や奄美の歴史や学問など、興味深い話を色々してくださり、車のパンク修理や浜辺でのテントを立てかたなど、普段しないような体験も教えてくれた。

●感想など

あやまる岬の話は少し出たが、実際に海水浴を楽しんだのは加計呂麻島で、海は素晴らしく透き通ってとても気持ちが良かった。３月や８月など長期休暇になると隣の沖縄などでは大量の観光客が押し寄せるが、奄美大島（特に加計呂麻）にはこれほど美しい浜辺があるにも関わらず、あまり観光客は来ないようだ。沖縄と奄美大島では確かに距離的な意味でも文化的な意味でも似通っているが、現在の観光地として見ると沖縄に旅行したついでに、奄美の名瀬のあたりを少し周って帰る観光客がほとんどだと思われる。

人が流入してこず、逆に育った人たちも土地を出ていく地域では経済的にも社会的にも、その地域の共同体を維持していくことが困難になると限界集落になっていってしまう。そういった点でも観光客の招致は必要なことであるし、地域の活性化にも繋がるが、反面現地の人と観光客のトラブルや、ゴミの増加に伴う環境汚染にも繋がり得る。現に沖縄のビーチでは観光客の残したゴミを処理する管理センターが必ず存在し、サンゴの減少やビニール袋を食べて死んでしまうウミガメもいる。

沖縄に隠れてしまいがちだが、南国の自然を満喫できる旅行先として奄美大島はとても優れていると思う。もっと奄美の自然や景色をたくさんの人に知って欲しいと思う反面、無闇やたらと観光客が増えても現地の人たちに迷惑をかけてしまうし、自然も汚してしまう。また、奄美に限らず沖縄の人もだがよそ者に対してもとても親切でおおらかに接してくれる。これは僕らが観光客であるという以上に風土や気候がそのような気性を生んだのだと思う。そんな人たちの親切さも裏切らないように、学生という立場ではあるもののエコキャンパスツアーに参加した以上は何かを考え、発信していかなくてはならないだろう。

アイランドキャンパス

09-1-068-0424
文化学科　現代文化コース
坂下智哉

皆さんは「奄美大島」と聞いて、まず第一に何を思い浮かべますか？
自然がたくさんある…というのが大多数の方々の意見でしょうか。私も同意見でした。しかし同時に、田舎であるが故の不便さというのが頭をよぎりました。
米や調味料などを持って行かなければならない場所なのか…。電波も無いような場所なのか…。そんな場所に１週間も滞在するのか…。さらに周りは知らない学生ばかりで、とにかく奄美大島に対する先入観はあらゆる点においてネガティブな面が勝っていました。出席を決めた１番の理由も「清ゼミ所属だから行こうかな」という事務的な感情。

そんな思いで伊丹空港を飛び立ったのですが…。

ゼミ合宿がただの旅行と大きく違った点を１つ挙げるとしたら、私は真っ先に「人との出会い」をピックアップします。
先述したネガティブな面を払拭してくれたのが、奄美大島でお世話になった人たちであるから。ただの旅行で奄美大島を訪れていた場合、今回のように人と出会う旅になったか…答えはノー。私の性格上、郷土料理だって食べていたかどうかわかりません。そんな郷土料理を食べるだけでなく、我々に調理方法を教えてくれました。
さらには滞在場所であった清水、於斎、徳浜、各所で色々なものをご馳走してくれた、家にお邪魔させてもらった、話を聞かせていただいた、送り迎えをしていただいた…。
奄美という地域にリアルタイムで暮らしている人たちと関わることができたのはゼミ合宿ならではの関わりだと思います。

今回の奄美合宿において、私個人のテーマとして１つ掲げていたことがありました。
それは「奄美大島の人たちを写真に収めること」
先程も挙げましたが、奄美に住んでいる人たちとここまで深く関わることができたのは、ゼミ合宿のおかげ。もっと言えば、清先生がもっているパイプのおかげ。ただの旅行で奄美へ行っていたら、人物撮影なんか絶対やっていません。私の性格上。

今回のゼミ合宿で清先生には到底及ばないものの、私たちにも奄美との繋がり…すなわちパイプが敷設されたように感じます。このパイプを廃れさせないように、今後活用して行きたいと考えています。

以上

私の奄美体験

亀田珠理亜

今回の奄美旅行は天候にもメンバーにも恵まれ、本当に充実していたと思います。人付き合いが苦手な私が、全然知らない人達と一週間近くも寝食を共にすることができるのか、と旅行前日から悶々としていましたが、それも杞憂に終わりました。満天の星空のもと浜辺にテントを張って寝たり、陸地を歩くヤドカリを見たり、シュノーケリングで魚に触れたりと、初めて体験することばかりで楽しかったです。近大マグロの養殖場の見学など近畿大学の活動を知るという貴重な体験もすることができました。夜道をハブが出ないかびくびくしながら歩くのも奄美ならではだと思います。

食べることが好きなので、先輩方が作ってくださった油ソーメンや島豆腐、豚味噌、山羊汁などとてもおいしく大満足でした。奄美名物"鶏飯"を作るために鶏を裂いている時、スーパーで売られているパックに入った鶏肉を見ても感じたことがなかった「命をいただく」という気持ちが強くわきました。食事は食べることはもちろん、準備や片付けもみんなと一緒にすると楽しく、距離が縮まった気がします。

奄美は星空も綺麗だけれど、海もとても綺麗でした。特に徳浜の海は透明度が高く、浅瀬でも魚が泳いでいることに感動しました。奥に進むと色とりどりの魚がたくさん泳いでいて、もっと見たいと思い、調子に乗ってどんどん奥に進むと急に潮の流れが速くなり、自分の力ではどうしようもなくそのまま流されてしまい、海の恐ろしさも痛感しました。

奄美はゆっくりと時間が流れていました。人がせかせかと暮らしていない、のんびりと言い換えてもいいかもしれません。都会の人間は自然も時間も自分たちがいいように変えているけれど、奄美の人は自然を受け入れ、時間の流れに乗って生きているのだと感じました。

時間の流れはゆっくりでも、奄美で過ごした時間は本当に楽しく、あっという間。色々出来たなと思う反面、もっとこうしとけば良かった、こんなことをしたかったということもたくさんあります。特に里さんと榊さんとはもっとお話ししたかったという気持ちでいっぱいです。

帰りの飛行機から見る海もとても綺麗でした。奥に行くにつれて徐々に青色が濃くなっているのが分かり、その透明度の高さに驚くとともに、大阪上空に来た時に見た海にも別の意味で驚きました。川も海も濁っていて黄土色。見ていて悲しくなりました。勝手な願いですが、奄美は人も自然もなにもかもずっと変わらないままであってほしいです。今回の旅を終えて、なぜ一回生の時から参加しなかったのだろうと後悔するばかりです。ぜひ、多くの人に奄美の自然に、食べ物に、人に触れてほしいです。